



ブロンスワフ・ピウスツキ没後百年記念

# 講演と映画と朗読の集い ～ポーランド、サハリン、北海道～

## [第1部] 講演 13:30～15:00

井上紘一（北海道大学名誉教授）

ブロンスワフ・ピウスツキの生涯と仕事

佐々木史郎（国立民族学博物館名誉教授）

ピウスツキが収集したアイヌ衣文化

新井藤子（北海道大学大学院）

ピウスツキが日本に残したイメージ～明治から現在まで～

## [第2部] 記録映画 15:15～16:15

ピウスツキ・ブロンスワフ～流刑囚、民族学者、英雄～

ヴァルデマル・チェホフスキ監督（2016、日本語字幕付き）

## [第3部] 朗読 16:30～18:00

長屋のり子 / 盲いたチュフサンマの悲歌（自作詩）

白井順 / チュフサンマとピウスツキとトミの物語（花崎皋平作、未知谷、2018.5）より

酒谷茂靖 / 土橋芳美作品（ペンリウクとバフンケについて）

会場：北海道大学学術交流会館 1F 小講堂

日時：2018年7月29日（日）13:30～（開場13:00、入場無料）

主催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、北海道ポーランド文化協会  
ポーランド広報文化センター

後援：駐日ポーランド共和国大使館

連絡先：スラブ・ユーラシア研究センター（越野）gkoshino@slav.hokudai.ac.jp

北海道ポーランド文化協会（安藤）hokkaidopolandca@gmail.com, 080-4071-0956

（図）ブロンスワフ・ピウスツキ，Adomas Varnas 画 1912，ユゼフ・ピウスツキ博物館所蔵、画像提供 Witold Kowalski  
この企画は、ポーランド独立回復100周年記念事業の一つとして、実施されるものです。



ポーランド広報文化センター  
INSTYTUT POLSKI TOKIO



駐日ポーランド共和国大使館

*wiepodlega*

ポーランド  
独立回復  
100周年

## ペンリウク バフンケ 二十六時のペウタンケ

作 土橋 芳美

なぜだ

なぜ そなたが

ここにおる

カラフトアイヌで

その名を知らぬ者がいないとまで

言われた

バフンケよ

嗚呼

嗚呼

聞くまでもないことよ

ここが

「アイヌ納骨堂」などと

まやかしの看板のある

北海道大学医学部の

「標本保存庫」

だとすれば

このわしが

死後

三十年が過ぎた

一九三三年に

墓を

掘り返され

「学者ども」によって

無残に

運ばれたように

そなたも

同じめにあつたと

推察される

あの樺太の

地から

どうやって 運んだのか

想像するに

胸が痛む

きりきりと

きりきりと

嗚呼

これが

人間のなせる

わざなのか

わしを知っておるか

ヒダカノ国

ピラトリの

ペンリウクだ

わしがまだ若かったころ

樺太に行き

そなたの父

ハセランケと

会ったことがある

そなたは凛々しい

若者で

ハセランケの自慢の種だった

「見よ

わしの息子 バフンケを

彼は剛気で

俊敏だ

時代が どれほど

変わるうが

こやつが

わが民族を

守るだろう」

そう言って

眼を細め

白い髭をゆすって

笑っておった

アイヌの男への

最高の褒め言葉に

こんながある

なに

これは樺太も北海道アイヌも

同じだ

シレットク(器量がいい)

ラメトク(度胸がある)

パウエトク(雄弁である)

この三つを兼ね備えた者が

コタンの長となると

決まっておった

そなたは

この三つの全てで

抜きん出ておった

アイヌは小柄な者が多いなかで

そなたは

今でいうなら

二メートルに

近い大男であった

そして容貌が

端正で

しっかりとした太い眉と

深い知恵を持つ者の

静かな眼差

筋の通った高い鼻

女にも男にも

これほどの美貌は

ないであろうと

まさに

シレットクよ

そして

狩りにも優れ

帆かけ舟で

海をわが庭のように

駆ける

まさに

ラメトク

樺太でも

一、二を争う

雄弁家

ハセランケの血を

ひくだけあって

その声の高さ太さが

際立っておる

理路整然たる

弁舌は

他を圧倒する

まさに

パウエトク

そなたの父ハセランケは

神からの

預かりものでもあるかのように

「見よ、わしの息子の立派さを」

と、来る者に

誇らかに語っていた

ペンリウクよ

わたしの若い日のことを

覚えていてくれて

ありがたい

なぜだと

そなたも言ったが

なぜわれらが

こんな所に

囚われねばならぬのか

ポクナモシリ「死者の国」

にいるはずの

われらが

いったい

どんな罪があつて

こんな

辱しめをうけるのか

墓を掘り返され

その骨を

こんな場所に

置かれねばならぬのか

誰だ

誰だ

いったい

誰が

こんなことをしたのだ

人間の  
にんげんの  
皮を被った化物よ  
正々堂々と  
このバフンケの前に現れよ  
三日三晩でも  
千日でも  
万日でも  
不眠不休で  
チャランケ「談判」  
しようぞ  
アイヌには  
人間として犯してはならぬ  
絶対の決めごとがある  
その第一番目は  
死者の霊を  
冒瀆してはならぬということ  
厳しい自然のなかを  
生き抜き  
われらに命を  
つないでくれたからこそ  
今がある  
その者たちを  
敬い  
感謝し  
慰霊することは  
人間として  
第一の

礼儀と教えられた  
朝に  
夕に  
感謝を伝え  
時季になつて  
コタンをあげた  
シンヌラツパ「先祖供養」を  
行ったきた  
その墓を  
暴くとは  
なんとという大罪か  
「九四三番 頭骨  
個人特定可能  
一九三六年八月  
樺太島にて発掘  
発掘発見主体 北海道大学  
医学部解剖学第二講座  
相浜 I  
として管理」  
【北海道大学医学部アイヌ人骨収  
蔵経緯に関する調査報告書より】  
なんとという  
読むに耐えない  
文献か  
一九二〇年に  
六四歳で生を閉じた  
わたしは

丁寧  
コタンの者らによって  
埋葬された  
そのために  
用意されていた  
最上の  
着物と多くの  
副葬品だ  
父が  
死者の国、ポクナモシッへ  
出向くとき  
恥ずかしくない  
身支度をするのだと  
口うるさく言っていた  
わたしは妻に最上の  
着物を作らせていた  
そうして  
わたしは  
先にいつている  
先祖たちと  
再会するのを  
楽しみにしていた  
「解剖学研究資料収集のための発掘」  
だと  
いったい  
誰の  
許しを得て  
このことが  
成されたのか

死して

まだ

十六年しかたっていない

わたしの墓を暴き

一九七センチの

大柄な遺体を

掘り出して

「これは 立派な資料だ」と

ほくそ笑む

学者どもの

ふやけた

醜い顔が

眼に浮かぶ

カムイよ

このことの

罪の深さを

アイヌへの

にんげんへの

冒瀆を許すなかれ

アイヌモシリ

ホツカイドウと呼ばれようが

カラフトと呼ばれようと

われらは

その昔から

この地に暮らし

アイヌの

にんげんの

住む大地として

この地を崇めてきた

死者を弔い

生きて在るものは

人間ばかりでなく

鳥も

熊も

魚も

虫も

植物も

共に存ることを

喜びとして

生きてきた

こんな

こんなむごい扱いを受ける

いわれはない

バフンケよ

その怒り

もっともなりと

わしも思う

墓を暴き

遺体を掘り返し

持ち去るなど

これは

れっきとした

犯罪であろうよ

そこに

どんな言い訳が

たつのか

「学問の」

「人類の起源の」

だと

小賢しい

しかし不思議に思うこともある

事件を起こした

罪人は

証拠品を隠すことに

必死だと聞くが

この者らは

その

証拠品を

陳列して

誇っておる

ペンリウクよ

わたしは

死んで

たった十六年で

墓を掘り返された

一九三六年のことだ

その遺骨には

まだ肉片が

付いていただろうよ

それを

どうしたのか

大鍋に入れて

煮はがしたか

おぞましい

おぞましいかぎりよ

にんげんの

にんげんのなせることか

アイヌの

血と

肉片の混ざった

その鍋の汚水は

どこに流されたのか

排水管を通して

この大学の周辺に

撒かれたか

そのとき

「学問」も

「研究」も

汚辱の沼に

堕ちたのだ

北海道大学は

アイヌ人骨の多さを

誇っているようなところがある

しかしいづれ

わかるであろう

数の多さが

恥の多さに

罪の深さに変わるときがくる

各地のアイヌたちが

返せと

裁判をおこしている

なぜ

返さないのか

理解に苦しむ

返すことで

己が恥を天下にさらすことになることを

人並みに恥じているのか

しゃらくさい

最早

隠しようもない

事実として

世間に知れわたっておる

バフンケよ

わしが地上での最後の年

一九〇三年（明治三六年）の九月に

そなたと

関わりのある

男がわしを

訪ねて来たぞ

バツツワフ・シエロシエフスキ

というアイヌ研究者の

通訳を兼ねて

プロニワフ・ピウスツキ

という者だ

後にその男は

そなたの姪

チュサンマと

夫婦になったそうだな

実直ないい男だったと記憶しておる

彼もまた

アイヌ研究者の一人に数えられるが

人間としての

理性と

品性を

失わぬ

超えてはならない

非礼をしなかった

バフンケよ

そなたの遺骨返還の申請を

してくれる者がおるようだな

わしの骨も

子孫の者が

北大と掛け合い一度は

「返します」

と言いな

「再調査したら別人の

可能性があります」

と返還を拒んできた

調査したという

骨が

ほんとうにわしの骨だったのかどうか

疑わしい

子孫の同意なく

やれ「調査」だ「研究」だといって

いまだに

「研究材料あつかいだ」

わしの時のように  
そなたの遺骨も  
なにやら理由をつけて  
返さないのではと案じておる

北海道大学は  
返還申請に来た者に  
やれ戸籍謄本だ  
子孫だといふ  
証拠はなにかと  
高飛車だ  
ならば問う  
わしらの墓を  
掘り返したとき  
誰の許可をとって  
どんな証明書をもって  
したのかと

わしらは  
ポクナモシリ「死者の国」  
にいるべき者  
元に  
在るべきところに  
われらの遺骨を  
返すべし

嗚呼  
嗚呼  
バフンケよ

ペウタンケの「危急をしらせる叫び声」  
叫びを  
あげよう

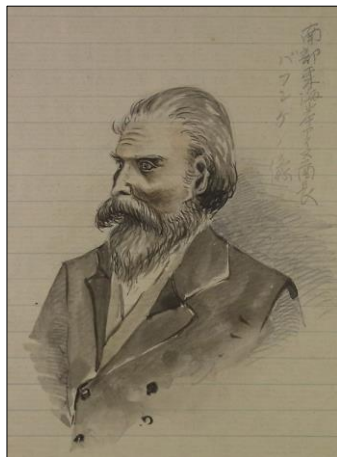
プロニスワフ・ピウスツキ没後百年記念の集  
い、二〇一八年七月二九日、北海道大学学術  
交流会館小講堂にて酒谷茂靖氏により朗唱

(著作紹介) 痛みのペンリウクく囚われのアイ  
ヌ人骨、土橋芳美著、草風館、二〇一七・三

写真(右) 土橋芳美(左) 長屋のり子



写真(右) ペンリウク、Adolf Fischer 画 一八  
九七、国際日本文化研究センター蔵  
(左) バフンケ、太秦供康画 一九〇五、北海  
道博物館蔵



(動画) <https://www.youtube.com/watch?v=LM9WWmFOqSw&feature=youtu.be>

## 盲いたチユフサンマの絶唱

—— その悲歌、哀歌、そして挽歌 ——

作 長屋 のり子

私は樺太アイヌの長老（エカシ）バフンケの姪チユフサンマ  
 一九一八年五月雨の朝、パリ芸術橋（ボンデザール）からセーヌ川に  
 身を投じて死んだ夫、プロニスワフ・ピオトル・ピウスツキを  
 恋うて慕って恋うて惚んで歌う、私のひりつくような白鳥の歌。  
 ニシバ、あなた聴こえますか？ 果てしない情動の歌、  
 ニシバ、聴こえていますか？

故国ポーランドの過酷な政治の歴史から押し出されて

あなたは流刑人としてこの地にやってきた。

この樺太（サハリン）に。私たちの島に。私たちの恩寵の、

長く先祖の守り続けた厳しい愛しいこの島に。

あなたは絶望し荒廃した他の流刑人の誰とも違った。

神から授かった生を生き切ろうという意志を

凜然と額に結んで輝きを放ちつづけていた。亡国の不安の、

その黒々とした暴力の記憶を背負いながら ニシバ、あなたは違った。

あなたは他の誰とも誰とも違った。崇高だった。

世界の不条理、歴史の苛酷さのなかで、

あなたの精神の発条（バネ）は頑丈だった。あなたは ニシバ

そのためにこの島にやって来たかのように、私たち先住民族に

臆せず親愛をこめて近づいた。あなたの心の底から

こみあげてくるような人懐っこい微笑みを

私達 樺太アイヌの誰もが忘れない。決して忘れない。

ニシバ、あなたは比類ない慈しみをたたえて私達の  
 村にやって来た。あなたは熱い情熱と深い畏敬をこめて  
 私達のエカシに言った。

「私はあなた達を深く知りたいたい。そして深く学びたい」と。  
 ロシア学士院の依頼で、私達 民族のことを

学究的に知りたいたい、調べたいのだと申し入れた。

学究的なことは皆目 私には分からないし、知らない。

私達、私達アイヌは天の恵みを得て、ここを原郷と信じて、

美しい原始の慣習を、慎ましく清楚にこの地で生きつづけてきた。

森羅万象を神と崇めて、此処で生きつづけてきた。

神と共にある暮し、レラ（風）アンチュプ（月）と共にある暮し

単純な楽器と精緻な旋律の神謡のある暮し。

人間の営みへの深い肯定と悲哀との調和を豊かに生きて

私達がどこからきたものであるか、そのルーツなど

考えもしないことだった。私達には必要だった。

樺太こそが私達の生命、私達の精神の美しい原郷。

私にはただ日々エカシのもとに通いつづける

あなたの不屈の、勇武の精神がひたすらひたすら眩しかった。

今も私に 真実大事なのは、あなたにはじめて抱かれた日の



白鳥湖のあの美しい峻巖の湖畔の、風が

ピキピキと割れた二月の夕暮れのことだけだ。

霏々と舞いつづけた雪(ゆき)がびたりと予感のように止んだ

あの日のことだけが身を振るるほどに懐かしい。

直角に真冬の夕陽が落ちて、

分厚い雲の切れ目が遠く薄赤く染まっていた。

白鳥湖の水は半分凍りついてキシキシ鳴っていた。

対岸の岩山は雪に覆われて氷山のようにだった。

水際には四十五億年前、地球が固まった当時

そのままのように黒っぽい岩の断層面が荒々しく

むきだして凍っていた。太古そのままに荒涼と

張りつめる極寒の静寂の中に二人立ちつくして、

そしてニシパ あの日、あなたは私を不意に抱き寄せた。

あなたは激しく優しく私を抱いた。

あの暗く深い夕暮れ、あなたは湖の波だった。

波のように私は抱かれた。私の魂の肌はまだ

しんしんと染み透(とお)ってくる不思議な波。

それは靈氣とさえ言っていていいもの。

この寒冷の地で孜孜々と、生命を繋ぎ紡ぎつづけた

私達 先住民族への畏敬を込めて

白鳥湖のほとりで、二月の夕暮れ

私を聖なるものを抱くように、愛おしく狂おしく

そして大事に本当に大事にニシパ、あなたは私を抱いた。

私の天(てん)に向かって放つ声を

世界一美しい音楽を湛える声と讃え、

愛しい愛しいと叫びつづけ、美しい神秘のアイヌとさえ

あなたはあの夕べ 私に囁いた。あの日、あなたが

ポーランド人の強い魂の力の比類ない証として、私の体内に注いだ

熱いものは、あれは一体何だったのでしよう。あの熱源は

年若い盲いた今も私の身体の奥でつんぎく悲鳴のように疼きます。

あの夕暮れ、あなたも私も自分の魂の働きに本当に素直でした。

あの湖の辺りのあの、あなたのバルサムの匂いのする

息が優しく吹きつけられた夕暮れを思うと

私の心は今日も生々しく垂直に立つのです。あの夕暮れは

生命以前の原始地球の風景の中にもあったもの、

宇宙全体でひそかに波打ち続けていたもの、と今は思えます。

静かな激しい宇宙の慈悲として私の魂に

しみ入り、注がれたあなたの血は、やがて

一九〇四年、長男、愛しい助造の誕生に結びました。

助造はきわめて鋭敏なニシパ あなたの感受性を

そのまま引き継ぎました。賢い聡明な男の子です。

一九〇五年まで続いた私達の琴瑟の営み、蜜月の日々。

サハリン東海岸、相浜の海辺、相川と呼ばれた小川のほとり。

アイハマアイカワ、其処はその地名さえ

愛(アイ)に縁どられた場所。神秘的な光耀のかがよった場所。

今も見えない眼から涙がにじむほどに

懐かしい感覚が身の内を走ります。ニシパが私に

触れた場所の全てがかなしく今も燃えたちます。

日露戦争のあと、あなたが、独立戦争の絶好の機と勇躍、

祖国を奪い返すために鳥が翔つようにポーランドに帰国して、

私はその冬、一人寂しくあなたの面影を深く映す、

娘キヨを生んだのでした。

それからいくつもの春が巡って、駒鳥は群れなして、

私の頭上を飛び交い囀ったけれど

ニシパ あなたは帰って来なかった。

祖国を奪い返してから、祖国の独立を果たしてから

「必ず迎えに来る」という ニシバ！ あなたの

疑（まご）うことない真摯な言葉を信じて、私は待った。

あなたの残した識字学校の教師を勤めながら、

私は働きづめ働いて待って待って待って待ちつづけた。

湖がさざ波たてるたび、小川がサラサラ流れるたび、

春の小鳥達が鳴き交わすたび、私の心はムックリの音のように

トンコリの音のように さざめいた。

一九一八年、一二三年ぶりにポーランドが独立を果たしたと、

樺太（サハリン）の白樺林を吹き抜ける薫風が私に喜々と伝えた

けれど、

それで私の血は激しく躍ったけれど、あなたは ニシバ 帰って来

なかった。

あ、その年にあなたがパリでセーヌ川に身を投じ、ミラボー橋

の袂で

発見されたと知らされたのは一九二五年の、

凍った海を裂くように 激しく太陽の昇った日のことです。

呆然と海をみつめていた私に、あなたの弟、ポーランド革命の指揮者

ユゼフ元帥の使者から 丁重に 悲痛にそれはもたらされました。

その朝の海のように 私は真つ二つに切り裂かれました。

その日、私と助造とキヨは 永遠に夫を 父親を 失ったのです。

泣いて泣いて溺れ死にでもするように泣いて世界が崩れ落ちました。

これまで屹立しつづけた対岸の氷山が 一瞬にして砕けおちました。

与謝野晶子の詩のように「旅順の城は滅ぶとも

滅びずとも 何ごとぞ……」です。

女には革命はいらない、大義など、いらないのです。

あれから涙の乾く間なく 悲しみの月日は流れて 今日は一九三四年、

夕暮れのアイハマの海には 赤い波光がきらめいて

私の耳底でザザザと鳴り出します。ニシバ！

交わしたたくさんの睦ごと、あなたの振動、私の振動、が鳴ります。

私はあなたに焦がれて焦がれて泣きつづけて

今はもう盲となりました。盲いた私には今、

宇宙から降るこの世のものならぬ澄んだ音が

本当に聞こえつづけるのです。

涯ての 涯てから 遥かなるものの呼ぶ声が 本当に聴こえるのです。

私は今、やっと 気付くのです。

十六年前、あなたがパリで不慮の死を遂げた日、

私は夥しい白鳥が まるで天地の運行のように

悠久に ひたすらに アイコタンの

夜穹（よぞら）を流れるのを見えています。

一羽の鳳の鋭く切なく親しく、懐かしく

鳴くのを聞いています。クオオークオオ

幻聴ではなく あれはまさしく まさしくニシバ あなたでした。

あなたの かなしい 切り裂く、ペウタンケでした。

命賭した 革命を終えて、パリからあなたの魂は

真つすぐに 一目散に 私と、あなたの潔い血を継ぐ あなたの

子供達 愛しい愛しい助造とキヨの待つ 樺太（サハリン）に

帰って来てくれたのです。アイハマに、アイカワに

ニシバ！ ニシバ！

あなた聴こえますか？

あなた聴こえていますか？

もうすぐ もうすぐ チュフサンマは ニシバ

あなたのもとに赴（おもむ）きます。

私も亦 白い鳳となって ニシバ！ あなたの今過ごす場所

目指して 飛び翔ちます。

ニシパ あなたが愛でてやまなかつた アイヌの  
美しい旋律で、トンコリのように、ムックリのように  
優美にクオオークオオと 鳴きながら 空に舞います。

天国（ハライソ）の小鳥たちの 囀る 岸辺で

もう一度 あなたに抱かれるために。

もう一度 あなたに 神秘のアイヌ！と 優しく囁いて貰うために。

あなた 聴こえますか？

樺太アイヌ、チュフサンマの声が

あなた 聴こえていますか？

あなた、あなた、聴こえていますね。

この悲痛な絶唱の翌年、一九三五年、チュフサンマ没。ポーランド革命の雄 ブロニスワフ・ピオトル・ピウスツキにその清らかな一生を、全生涯を捧げて、チュフサンマ逝く。  
因みに、チュフサンマの樺太アイヌ語の意味は「月から降りてきた女」だそうです。そのことにも胸衝かれます。

ブロニスワフ・ピウスツキ没後百年記念の集い、二〇一八年七月二九日、  
北海道大学学術交流会館小講堂にて朗唱

\* 本稿は、朗読会「午後のポエジア」7 没後百年記念（詩劇）ピウスツキ、二〇一七年五月二七日、ドラマシアター「ども」にて朗唱した初版「盲いたシンキンチョウの絶唱」の改訂新版です。また、ルツィアン・ブハリク編『ブロニスワフ・ピウスツキから萱野茂の時代にかけてのアイヌの世界』（ジョルイ市立博物館 二〇一八、八〇〜八三頁、ポーランド語訳九〜二六頁、安藤厚英訳一四五〜一四八頁）に収録されました。

（動画）

<https://www.youtube.com/watch?v=DnPiKPvVjc&feature=youtu.be>

写真（右）ブロニスワフ・ピウスツキ、一九〇三函館・井田写真館にて（中）助造を抱くチュフサンマ、一九〇四〜〇五相浜 ブロニスワフ撮影（左）チュフサンマ、一九三一 北里閣撮影



（著作紹介）改訂版 睡蓮長屋のり子詩集、  
野草社、二〇一八・八

発行  
北海道ポーランド文化協会

〒060-0018

札幌市中央区北 18 条

西 15 丁目 3-19 安藤方

電話・FAX 011-556-8834

hokkaidopolandca@gmail.com

POLE

第 96 号 別冊 2 2019.1.31

北海道ポーランド文化協会 会誌

ブロニスワフ・ピウスツキ(1866～1918)はリトワニア生まれの優れた人類学者です。樺太島に流謫され19年の歳月を過ごした極東ではアイヌ・ニヴフ・ウイльтаなど極東先住民研究に従事、この分野では草分けと評価されています。1980年代半ばには北海道大学がピウスツキの収録した録音蠟管の音声復元に成功し、アイヌ最古の肉声が復元されたことが話題になりました。

今年は彼の没後百年に当たり、ポーランドでは日本との文化交流事業の一環として、ピウスツキ没後とポーランド独立回復の百周年(2018)、そして来年は両国の国交樹立百周年(2019)を慶賀するさまざまな行事が計画されています。

日本の没後百周年記念イベントでは3名の専門家の講演と記録映画上映に加えて、ピウスツキの妻チュフサンマとその叔父バフンケをめぐる詩作3篇の朗読も企画しました。日本におけるピウスツキ研究がその裾野を着実に広げる現場にお立ち会いください。奮ってのご参加を呼びかけます。

## プロフィール

### [第1部] 講演

井上紘一(いのうえ・こういち)

北海道大学名誉教授、ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌：二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイльта、東北大学東北アジア研究センター、2018 ほか

佐々木史郎(ささき・しろう)

国立民族学博物館名誉教授、ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界：比較民族誌的研究、国立民族学博物館論集4、風響社、2016 ほか

新井藤子(あらい・ふじこ)

北海道大学大学院修士課程、ピウスツキと日本、北海道、先住民族、POLE 87、2016.1 ほか

### [第3部] 朗読

長屋のり子(ながや・のりこ)

手芸誌主筆を経て詩人、随筆家、主著 小説「樋口芳男の手記」プレス東京出版、詩集「睡蓮」ぼえとりくす舎、「蝶の背に乗って」アニマアニマ協会ほか、小樽 春香山在住

白井順(しらい・じゅん)

小樽市の和楽器(箏や三味線など)専門店、二見屋邦楽器店主。視覚障害者の為の朗読本作成ボランティアで基礎を学ぶ。「淡々と、でも」という読み方はその時から。札幌 山猫座朗読会、FM おたる等に出演。

花崎皋平(はなざき・こうへい)

1931年生まれ、小樽在住、文筆業(哲学・社会思想・詩など)著作「生きる場の哲学」、「アイデンティティと共生の哲学」、「静かな大地～松浦武四郎とアイヌ民族」ほか、詩集「アイヌモシリの風に吹かれて」、「風のとおる道」、「チュフサンマとピウスツキとトミの物語」

酒谷茂靖(さかたに・しげやす)

「朗読」の表現宇宙の豊かさ深さに心魅かれます。肉声による作品世界の表出、時空を越える心の旅を願い、活動を続けております。

土橋芳美(とばし・よしみ)

詩人、痛みへのペンリウク：囚われのアイヌ人骨、草風館、2017(第51回北海道新聞文学賞(詩部門)佳作)ほか



(1) チュフサンマ, 北里闌 撮影, 1931 (2) バフンケ, 太秦供康 画, 1905, 北海道博物館所蔵 (3) ペンリウク, Adolf Fischer 画, 1897, 国際日本文化研究センター所蔵 (4) ブロニスワフ・ピウスツキ百年忌追悼行事, 白老・旧アイヌ民族博物館, 2018.5.17